

明珠

龍泉院
参禅会会報

24

平成8年10月5日

癸足二十五周年記念号

天童寺堂宇^{いらか}の藁



五山巡拝を円成して

龍泉院住職 椎名 宏 雄

本年四月末から五月初めにかけて、当山参禅会員等二二名とともに中国の禅門五山巡拝を無事に円成できましたことは、私にとりましても大きなよるごびであります。これは、当参禅会が本年の発足二五周年を期して行った春の記念行事でありました。

申すまでもなく、歴史的にみれば中国仏教は日本仏教のふるさとであり、その風土や文化は日本仏教にとつては常にモデルでした。特に自然の風光を愛し、修行生活を重んじる禅門の特色は、中国の山河や伽藍の佇い、そしてそこで行われる生活を範として成立したのであります。

私たちがふだん学んでいる禅門祖師たちの言動も、坐禅の仕方、みな中国で生まれたものが源流となつているのであります。その意味からも、私は中国の禅道場をこの眼で見、この足で踏み、この頭で考えることが、禅の流れや思想を正しく理解するためには欠くべからざることだという認識を、かねてより強く抱いております。ですからこそ、これまでに何とかやりくりをしてまで、中国の祖蹟踏査を一〇数回、延べ二百か所あまりも訪れてきたのであります。

ただし、唐代に生まれた古い禅の祖蹟は、あの広漠たる大陸のふところ深くの山中に散在しているものが多く、それらを踏査することはけつして容易

ではないのです。一般の方には、交通や宿泊上の難点があつて、とてもお勧めできる現状ではありません。それにくらべて、南宋時代の初めに成立した禅門五山は浙江省北部に集中していますし、また大都市に近いという関係から、比較的に行登は容易であります。

禅門五山（径山万寿寺・杭州靈隱寺・同浄慈寺・寧波阿育王寺・同天童寺）は、中国で古くから庶民の素朴な信仰を集めてきた四大仏山（五台・九華・普陀・峨眉山）とは好対照であつて、宋代以後に中央や知識人たちの帰依や保護を受けて、中国仏教の中心的な地位を占め高い文化をつくり出すなど、新しい仏教の展開でありました。わが道元禅師が如浄さまのもとで大法を相続された天童寺は、こうした江南で花開いた五山の一つでした。しかし禅師は、如浄さまを通して、むしろ古く純粹な唐代の禅のこころをうけつがれたのであります。

私にとつての五山は、径山こそ二度目ですが、他はいずれも四度目の拝登でした。それでも天童寺はいつもなつかしく、胸の高鳴りをおぼえます。とりわけ今回は、団員の要望により万松関から参道を歩いたことや、団員だけの坐禅や朝課の行修によつて、また感激と法悦を新たにすることができました。ありがたいことであり、初めて天童寺を訪れた大部分の団員の

皆さまの思いは、いかばかりであったでしょう。本誌上に語られているのは、きつとその思いの一部にちがひありません。

いうまでもなく、五山巡りの目的は、このような祖蹟拜登による慕古報恩にあつたわけですが、同時に中国仏教の現況を見聞し、文化や歴史を理解することもありました。その点、五山のほかにも寺院を訪れ、歴史の街である蘇州の風光にふれ、西湖の風や蘭亭の庭、雲棲の竹林や天一閣の文物など、多くの名勝を見聞できたこともたいへん有意義でありました。

さらに特筆しなければならぬのは、参禅会員のご家族や友人の方々が少なからず同行されたことです。これは、ただ団員相互の親睦と道交を温めただけではなく、会員同志の家族的理解をもたらし意味で、すばらしいことでした。私たちの諸行事は、つねに有縁無縁の多くの人々によつてささえられているのです。この有意義な記念行事によつて得られたものを、お互いに有縁の皆さまにおすそわけいたしましう。

さいごに、団の秘書長五十嵐嗣郎さんと添乗の神宮寺将雄さんには、初中後にわたつたいへんお世話になりました。心から感謝申しあげます。ありがとうございました。

頓首合掌



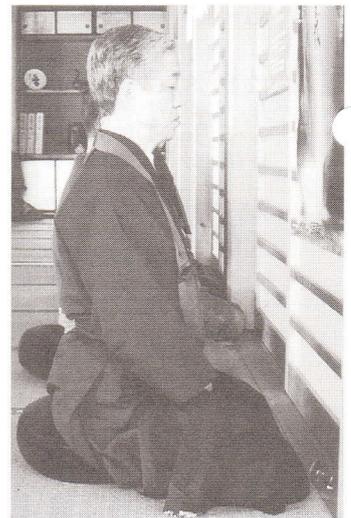
「自己をならふ」を かみしめて

幹事 小畑 節 朗

本年、参禅会誕生以来二五年を迎えることとなり、ここに深く思うことは、一つに、毎月第四日曜には、欠かさず坐禅が出来、そして『正法眼藏』の提唱が必ず聴聞できるということだ。これは龍泉院椎名老師の大慈悲心によるものです。変ることなく、いつ来ても三度の食事を頂くが如く、さらさらと。これは大変尊いことです。この尊さは仲々身に染みません。昭和四八年より参加させて頂いて二三年、ようやく此頃判って参りました。

また、発足以来の参禅者で、陰に陽に参禅会を見守って下さった大先達の高間さんの存在がまた有難いことでありました。

「薄紙でも只並べるのではなく、重ね積み努力が功德」とよく言っておられた。本年六月に亡くなられたが最後まで物心両面にご心配を頂いた。改めて感謝を申し上げる次第であります。今さら申し上げるのも何んですが、



龍泉院参禅会の会則は、
一、入会自由 一、退会自由
の二つだけ。来るも良し、来ざるも良し、しかし確かり坐禅はする。会報『明珠』最後の頁「龍泉院参禅会簡介」とおり、ということになります。この会則の意義は坐禅は参禅者めいめい持ちこたうということだ。

今年になって、椎名老師は「罰策は止めます」と言われ、「居眠りをしようが、坐相が乱れようが警策は合掌して求められたときのみ行う。」と宣言されたことでした。

これは大変なことだと内心驚くと共に、沢木興道老師が「坐禅とは自分が自分を自分することだ」と常に言われたとの由で、自己の深さに向って進む坐禅をせよ。とそれとなくお示しになったのだと思われる。

昭和五九年五月、鴨川永明寺での大授戒会で、戒師であられた永平寺の泰慧玉禪師が「坐禅は」功德は無くて

も良いのですが必ずございます。深く信じてお坐り下さい。」と言われた。何を信じて坐るのか、自分が自分する坐禅そのものであったのだ。と十年を経て今、深くかみしめている次第です。

当参禅会に一回でも坐禅に来られた人は発足以来数百人に成ると思うが一回か二回で止められる方が八割以上である。龍泉院で初めて坐禅をしてこれが機となつていつか他の処で参禅されるとすれば誠に嬉しい限りであり、縁あつて共に坐禅を行ずる人が「薄紙を重ねる」如くに少しづつ増加しているのも本当に有難いことです。

性別年令に関係なく永平高祖道元禪師のお言葉どおり「仏道をならふとは自己をならふなり」の坐禅は、自己ぎりの自己を行ずるとき他者の生存（いのち）に深く通じ合うのだと、深く信じて坐っていきたいと念じております。

合掌

「龍泉院参禅会」25年の歩み

- 昭和33年・椎名老師龍泉院住職に就任、坐禅指導開始
- 昭和46年・龍泉院参禅会発足
- 昭和58年・12月4日「第一回成道会」実施
- 昭和59年・12月2日「第二回成道会」実施
- 昭和60年・会誌「明珠」創刊
 - ・9月2日〜25日椎名老師「第七回駒澤大学中国仏教史蹟参観団」参加
 - ・12月8日「第三回成道会」実施
 - ・千葉県曹洞宗青年会主催「接心」に武田博志氏参加
- 昭和61年・6月7・8日「迦葉山一泊参禅会」実施
 - ・12月7日「第四回成道会」実施
 - ・千葉県曹洞宗青年会主催「接心」に小畑節朗・澤村国勝・武田博の各氏参加
- 昭和62年・7月4・5日「迦葉山一泊参禅会」実施
 - ・12月6日「第五回成道会」実施
- 昭和63年・6月4・5日「大雄山一泊参禅会」実施
 - ・聖僧文珠大士像新添協賛活動開始
 - ・12月4日「第六回成道会」実施
 - ・千葉県曹洞宗青年会主催「接心」に小畑節朗・加藤健之・澤村国勝・高野千代子・武田博の各氏参加
- 平成元年・6月10・11日「黒羽山一泊参禅会」実施
 - ・12月10日「第七回成道会」実施
- 平成2年・年番幹事制発足、三町勲氏・添田昌弘氏就任
 - ・6月9・10日「常真寺一泊参禅会」実施
 - ・皆川老師法話「教主釈尊」明珠別冊誌刊行
 - ・12月9日「聖僧文珠大士像開眼供養」
 - ・”「第八回成道会」実施
 - ・仏師萩原清光氏「仏像を造る心」明珠に寄稿
- 平成3年・2月17日「新年会」実施
 - ・年番幹事に今泉章利氏と杉浦上太郎氏が就任
 - ・5月会員清水利一氏逝去（冥福を祈念）
 - ・6月会員森正氏逝去（冥福を祈念）
- 平成4年・3月15日「新年会」実施
 - ・年番幹事に徳山浩氏と武田博志氏就任
 - ・5月16〜23日千葉県宗務所主催「第四次中国仏教史蹟参観団」に、椎名老師、五十嵐嗣郎・武田博志氏が参加
 - ・6月6・7日「総持寺一泊参禅会」実施
 - ・7月5日「龍泉院観音堂（大悲殿）落慶法要」円成
 - ・8月16日「龍泉院大施食会」に会員九名が作務奉仕
 - ・11月会員中川俊二氏逝去（冥福を祈念）
 - ・12月6日「第十回成道会」実施（会員配役）
- 平成5年・1月会員染谷はる氏逝去（冥福を祈念）
 - ・2月19日「新年会」実施
 - ・年番幹事に中島宏誠氏と宮本茂氏就任
 - ・5月31〜6月6日千葉県宗務所主催「第五次中国仏教史蹟参観団」に、椎名老師、小畑節朗氏が参加
 - ・6月12・13日「龍泉院一泊参禅会」実施
 - ・8月16日「龍泉院大施食会」に会員八名が作務奉仕
 - ・「北海道南西沖地震義援金募金活動」実施
 - ・11月6日「会友追善法要」実施（会員配役）
 - ・12月5日「第一回成道会」実施（会員配役）
 - ・12月26日「龍泉院年末大掃除」に会員多数作務奉仕
- 平成6年・2月13日「新年会」実施
 - ・年番幹事に寺田哲朗氏と安本小太郎氏就任
 - ・6月11・12日「龍泉院一泊参禅会」実施
 - ・8月16日「龍泉院大施食会」に会員九名が作務奉仕
 - ・10月5日「明珠」発刊十周年記念二〇号発刊
 - ・12月5日「第一回成道会」実施（会員配役）

夢叶う「中国五山巡礼の旅」

編集 杉 浦 上太郎

■平成7年
・12月26日「龍泉院年末大掃除」に会員多数作務奉仕
・2月13日「新年会」実施
年番幹事に五十嵐嗣郎氏と井之輪進氏就任

・4月「阪神大震災」義援金贈呈
・6月17・18日「可睡齋一泊参禅会」実施
・8月16日「龍泉会大施食会」に会員一名が作務奉仕
・12月3日「第一二回成道会」実施(会員配役)
・12月26日「龍泉院年末大掃除」に会員多数作務奉仕
■平成8年
・2月12日「新年会」実施

本年度二五周を迎える当龍泉院参禅会の飾付けとして、二年前から数名の会員より、中国禅門五山巡礼の旅への発案がありました。瞬く間に多くの会員からも是非との声が集まり、記念行事の一つとして実行することが決定いたしました。

早速、中国仏教史が専門で十何回と仏跡視察に中国を訪れていらつしやる椎名老師ご指導のもと、小畑さんと五十嵐さん、そしてこれまた中国専門のツアーコンダクターの神宮寺さん(ヤマト運輸トラベル)との最強の企画チームが編成されました。当然ながら、これ以上ない最高のプランができたのであります。出発日は四月二十七日と決定。数カ月前の参禅会から五十嵐さんによる懇切丁寧なガイダンス。旅行代金の払い込み、パスポートの送付と、次第に現実感が高まりムードは最高潮。

参加者の最年長の高野千代子以下二一名がなぜこのように「中国禅門五山巡礼の旅」に燃え上がったのでありましょうか。それは一つには、私たちが得たご仏縁が曹洞宗でありましたことから、開祖道元禅師様が、求道心の権化となつて訪れた中国の寧波港の風光に触れ、広大な大地を踏み、阿育王寺で禅師大悟のきっかけを与えたあの老典座との「如何がこれ弁道」問答に想いを馳せ、また如浄禅師のもとで修行に勤しまれた天童寺で、坐禅をさせていただきたいと熱望いたすのは、必然的欲求であつたかと思ひます。他の一つは、月例参禅会において坐禅修行の後、

年番幹事に澤村国勝氏と小沼亮氏就任
参禅会発足二五周年記念行事実施
①4月27～5月4日「中国禅門五山巡礼の旅」挙行
二二名参加

②11月4日「公開講演会」禅を聞く会「開催(予定)
・6月1・2日「福泉寺一泊参禅会」実施
・6月(参禅会代表)高間利介氏逝去(冥福を祈念)
・8月16日「龍泉院大施食会」に会員一名が作務奉仕
・10月5日「明珠」二五周年記念二四号発刊

椎名老師より「正法眼蔵」各巻をご提唱いただいておりますが、極めて難解といわれている「正法眼蔵」を、中国の仏祖や仏跡にまつわる故事をも沢山取り入れられ、大変解かりやすく、また興味深く解説してくださいます。また恒例の一泊参禅会時のご提唱の「典座教訓」や年二回発行されております会報「明珠」の巻頭を飾る老師のご執筆による「從容録に学ぶ」も然りであります。それらをおして会員一同の脳裏一杯に、中国の仏祖の故事がいきいきとイメージされていたことに違いありません。それ故いつの日か必ず中国を訪れたいとの潜在的欲求が心一杯に醸成されていたことが、熱意の発露となつたのであり、これまた必然でした。長くて早かつた今回の巡礼の旅。夢が現実となつたすばらしい旅でした。今行かれられなかつた方共この感動を分かち合い、更なる精進を誓い合いたいと思ひます。

この旅の素晴らしさは、以下会員諸氏の紀行文の熟読にて。
〈参加者〉团长・椎名宏雄老師、顧問・小畑節朗、副团长・添田昌弘、秘書長・五十嵐嗣郎、団員・寺田哲朗、寺田廣葉、高野千代子、高野哲男、中寫宏誠、安本小太郎、杉浦上太郎、宮本茂、今泉章利、今泉房子、井之輪進、小沼亮、宮内守、室橋旭、遠藤剛、美川武弘、美川恒子、松井隆、添乗員・神宮寺將雄(二三名)
〈中国ガイド〉総合ガイド・陳杏奎、現地ガイド・唐秀鳳、金銀華、唐毅、高麗萍、張慈鷄、李征宇。
〓氏名につき敬称略〓

中国五山の旅を

終えて

柏市 五十嵐嗣郎

庭を眺めると臯月が咲き始めています。中国旅行から帰ってきた時にはチューリップが一斉に咲いていましたから、あれからもう一ヶ月経ってしまったのです。早く紀行文を書かないと新鮮な記憶がどんどん薄れてしまう焦りから筆をとったのは、私一人ではないと思いますか？

昨年の二月、柏駅前の方野屋での新年会の席上、参禅会二五周年事業の一環として中国の寺院を参拝しようじゃないかという声が、小畑さんや杉浦さんから出されたのがつい昨日のように思い出されます。

新年会の後、具体的な進展はありませんでしたが、秋になり再び三人で銀座で飲んだ際に、小畑さんから中国旅行を進めるようにご指示がありました。早速、以前千葉県宗務所主催の中国旅行でお世話になったヤマト運輸の神宮寺さんに相談したところ、すぐ中国仏教史跡関係の本をお貸しいただき、貴重なアドバイスもいただきました。これらの資料をもとに、私な

りに中国寺院参拝プランを作成してご老師にご相談したところ、ご老師から天童寺での朝課や坐禪を中心とした中国五山を巡る旅ではどうだろうかとお話がありました。このコースは先の千葉県宗務所主催による「中国仏教史蹟参観」でほぼ一度訪れた所なので、内心別のコースにしてほしかったと思う反面、ここ数年目覚ましく発展している中国沿海地域を実際に見てみたいという副次的な興味も一方ではありました。この点については、まさしく今回の旅行で目を見張るばかりの変化をみせつけてくれました。

以前のどかな田園地帯で、耕運機に荷車をつけたのがパタパタ走っていた杭州から紹興までの街道は、工場が道の両側にびっしり立ち並び、自動車はひっきりなしに警笛を鳴らしながらすれ違っていくのです。また、前回はゆったり拝観できた寺院も今回は参拝者が桁違いに多くなり、参道は押すな押すなの人ごみで、特に靈隠寺の参道は浅草の仲見世以上の賑わいを見せておりました。ご老師のご指示で作った紫紺の旗がなければ、必ず迷子がでると思われるほどの混雑ぶりなのです。このことは、観光を楽しむ余裕ができるほど中

国の民衆が豊かになってきた事を如実に物語っており、ちょうど昭和30年代の高度経済成長時代の日本とどこか似ているような気がしました。



司会役の五十嵐さん

ただ日本と違うのは、小さいお子さんを連れられたお母さんが、お子さんに五体投地による参拝の仕方を熱心に教えている姿を多く見掛けたことです。このお母さん方が子供のころは、文革で仏教が徹底的に弾圧されていた時期ですが、それでも彼女達の中に脈々と仏教の精神が流れていたことに、感慨を新たにいたしました。

今でも中国では寺院から出て布教することは禁じられているようですが、民衆の中に宗教を求める心が着実に広がっているのではな

いでしようか。

今回訪れた寺院のほとんどは文革等の破壊から復興し、往時の姿に戻っているようですが、径山万寿寺は今まさに復興工事の真っ只中にありました。椎名老師も参加されている駒沢大学仏教遺跡調査団が発行した「祖師の古蹟をたずねて」では、五山第一の径山も畑の中に香炉が一つぽつんと建っている写真と鐘楼が載っているだけでした。

我々が訪れた時には天王殿・大雄宝殿・観音堂等の諸堂が造営中で、堂内では足場が組まれた諸像に金箔が張付けられている所を拝観させていただきました。

径山万寿寺監院の定康さんは物静かな方で、突然訪れた我々を中国茶で温かくもてなして下さった上に、自ら堂内を案内してくださいました。定康さんと高台に建っている鐘楼に登ると、真新しい黄色の壁と緑色の瓦が重なりあった伽藍が一望できました。文革中は農村に下牧していた定康さんも、今復興真っ只中の径山をみて、仏教を護りつづけた喜びを噛み締めているのではないのでしょうか。

社会主義という人為的な経済体制も所詮は市場経済に変えざるをえなかったように、人為的な思想

体制も精神を豊かにすることができなかつたのです。経済改革により経済的にも人間的にも豊かになりつつある中国も、香港返還や少数民族問題など難問を多数かかえています。二一世紀は中国を抜きにしては成り立たないし、中国もその様な自覚のもとに行動して行くと思います。

龍泉院参禅会三〇周年を迎える二一世紀最初の年に、もう一度中国諸山を巡る旅に出かけたいと思っているのは私だけでしょうか(三〇周年はインドへという話しもあるそうです)。

五山巡りと西湖の辺りの大極拳

船橋市 井之輪 進

私にとりまして外国への旅立は今回で二度目でありませぬ。初回の旅行では、異国の空港でグループを見失い心細い体験をしたことがありましたが、今回はそういったこともなく無事に旅行させて頂くことが出来ました。これはご老師様はじめ幹事さん添乗員さんの綿密な計画立案と検討の結果であったと感謝いたしています。

中国上海へは成田空港から三時間であつたと思ひます。一年を通して最良の季節であつたと思ひます。

五山巡りでは、中国の古い伝統を誇る仏像建築の規模の壮大さと繊細な彫刻技術は、気の遠くなる時空と、人力を費やして完成させる忍耐力には驚かされました。



蘇州駅での井之輪さん

蘇州の庭園、西園で見学いたしました。超微細な世界は、米つぶや髪の毛などに書かれていた文字などは、人間の技だとは信じられないものでした。又、刺繍研究所のシルク布地へのトラなどの両面刺繍の不思議な技術と、一本一本の絹糸で描く指先の器用さは、絶品であると感心させられました。

杭州では同室の小沼さんと早朝に西湖のほとりを散歩しました。朝もやの漂うほとりで、あちこちで大極拳を行っている老若男女のグループの様子を見学いたしました。

私達もいつの間にかその仲間入りをしていました。朝日の光輝く精気を体いっぱい受け神秘的な音楽に合わせてゆったりとした動きで、大自然の気を入れていく様子は独特な雰囲気でありました。他にも大刀を使った舞踊などや、サークルダンスなどを行って健康的な様子が伺えました。

お年寄りの方も腰が曲らず体が柔らかく肥満体の方も見かけず、若々しい身のこなしをしていたのは、この様な中国式体操を毎日実践しているからでないかと感じいたしました。

私達も同じように、毎日自然と一体になり体を動かすことが、いつまでも若さを保つ秘訣ではないでしょうか。

寧波、天童寺の二二〇〇年前に道元禪師様が修行された幽玄な山々に囲まれた伝統ある禅寺での体験は、三時半起床大本堂朝課、坐禅、おもしろかった精進料理と典座さん達との親しい出会い、世話役『おばさん』元気のいい声と、中国禅寺ベッド、洋風バストイレ

など色々な事が思い出されます。表敬訪問での修彰禪師様と椎名老師との会話は、高さんの通訳で行われましたが、私にとりまして貴重な体験となりました。

古天童寺での昔の名残を示す石碑や遺跡、堂内を案内してくれた僧侶さんの、山間部に響き渡って吠えるように唱えていた『ナムアミダアーブ……』の声は今でも私の耳に聞こえ、あのと時の様子が思い出されます。

旅行のみやげ物は、掛軸とそれに筆と硯を買いました。時間に余裕が持てるようになったら写経を習いたいと思ひ、実現出来るように努力しようと思ひます。留守の家内には、水晶のネックレスとシルクのシャツを値引して購入しましたが、結局シャツはサイズが合わずに長男が着る破目になりました……。

中国五山の旅は、壮大な中国大陸のほんの一部分でしたが、文化や宗教の多くのことを学びました。人間の礎いた歴史を後世に継承させていくことが、如何に重要であるのか認識させられました。この旅で参禅会の皆様とのお縁を新たにし、親睦を深め、お世話様になりましたことを感謝申し上げます。

参禅会

二五周年に当って

沼南町 添田 昌弘

「薫習」という言葉がある。龍泉院参禅会二五周年を迎えるに当って、まずこの言葉を思いつitted。念の為広辞苑を調べてみると「物が香が移り沁むように、あるものが習慣的に働きかけることにより、他のものに影響・作用を植えつけること」とある。

四半世紀の間、とぎれることなく参禅会が継続してきたことは、大変なことであり、又すばらしいことである。これは椎名老師のご指導のもと全参加者が、ご老師の「薫習」をいただいていたのである。私の人生にとって、参禅会に出席させて頂くようになって、大きな変化があったと思っている。ご老師に深く感謝申し上げます。今後もこの会が永く続くことを祈りたい。我々も参禅に励み、道元禅師のお教えを少しでも身につけるようにしなければならぬ。そして、我々は仏教徒として仏教徒らしくなることが大切であると思っている。

さて、二五周年記念の「中国五山を巡る旅」に参加させて頂いた。

天童寺での一泊参禅は感激するばかりであった。特に、古天童の静かなたたずまいは、道元禅師の坐禅をなさった場所であると思ひ、身のひきしまる思いであった。

老典座で有名な阿育王寺は、多くの参拝者でにぎわっていた。中国人の小さな子供が仏像の前で五体投地をしている姿は感動的であった。中国にもまだ仏教の根が残っているのだ。

径山万寿寺は狭い山道をバスで行った。途中、道路工事でストップさせられたり、対向車とスレ違うとき、崖の上のギリギリのところを通ったりで、日本では経験出来ないことである。次の機会に行くことが出来れば、歩いて登ってみたいものである。

江南は壮牧の詩に「南朝四八〇寺、多少の楼台煙雨の中」と詠まれているように、寺院が多く、唐の時代は仏教の全盛期であった。訪れた寺院はどれも、人であふれていた。観光ブームもあるのかも知れないが、仏教への関心が中国人にあるのではないか。

「地に蘇杭あり」といわれているように、天国に比せられた風光明媚な蘇州と杭州は、まさに「江南の春」で、緑が美しいところであった。そのすばらしさは、私が

書きつらねるより、白居易の「春題湖上」の詩を読むと良い。その一部を書き写してみる。

「湖上春来画図に似たり

乱峰圍繞して水平らかに鋪く

松は山面に挑す千重の翠

……

未だ杭州を眺る得て去る能わず

一半勾留するは是れ此の湖

今回の旅は良き先輩と良き仲間と一緒に、本当に楽しいものであった。これを機会に今後も影響し合い、互いに参禅に切磋琢磨していきたく思っている。

遥かに憶う

宝慶微月の夜

松戸市 小畑 節朗

『正法眼藏』諸法実相巻は、寛元元年（一二四三年）九月のご撰述で、道元禅師御年四四歳、この年七月京都より越前の地に入られて間もない時であった。

巻中、天童寺における弁道の消息、即ち南宋宝慶二年丙戌（一二二六年）春三月の微月の夜、本師長翁如浄禅師の普説入室のことを感慨を込めて、次のように記され

る。



室橋・小畑さん

「それよりこのかた、日本寛元元年癸卯にいたるに、始終一八年、すみやかに風光のなかにすぎぬ。天童よりこのやまにいたるに、いくそばくの山水とおぼえされども、美言奇句の実相なる、身心骨髄に銘きたれり。かのときの普説入室は、衆家おほくわすれがたしとおもへり。この夜は、微月、わずかに楼閣より、もりきたり、杜鵑、しきりになくといえども、静閑の夜なりき。」と。

如浄禅師は深更、方丈妙高台で、「天童山安居ちかきあり、如今春間、寒からず、熱からず、好坐禅の時節なり、兄弟如何んが坐禅せざる。かくのごとく普説して、いまの頃あり。云々……」とあつて、道元禅師は普説入室のことを詳しくお書きになっている。

往事を追懐することなど極めて稀な『眼藏』にあつて、ご自身の感慨を込めておられるのである。待ち望んでいた天童寺拝登は、平成八年五月一日、この日は陰曆三月一四日に當つた。

その夜は、寺内長庚楼に宿して、暮春三月一四日の朧月に照し出された太白の峰々、天童の大伽藍を見る。八百年にならんとする時空を越えて夢の如くに現前する春夜の風光に、かつて、永平高祖が妙高台上の如浄古仏の普説を聴聞し入室した夜を思い、感一入であつた。

宿天童寺長庚楼還憶寶慶丙戌三月微月夜
天童寺長庚楼に宿し、また憶う
寶慶丙戌三月微月の夜を

天童法鼓響殘更
入室威儀點眼睛
長翁深談般若曠
永平直覺實相詳
徧參古路迷朝霧
辨道遺蹤對晚晴
遙憶寶慶微月夜
今宵素影隔樓明
天童の法鼓、残更に響き
入室の威儀、眼睛を点ず。

長翁は深く般若の曠を談じ、永平は直ちに覚ゆ実相の詳を。徧參の古路に朝霧迷い、弁道の遺蹤は晚晴に對す。遙かに憶う寶慶微月の夜、今宵の素影、楼を隔てて明かなり。

翌五月二日は午前四時より朝課。少し風邪ぎみの私は、別に設けた參禅会の報恩法要から参加することとし、暁暗の長廊を独り経聲に導かれて大雄宝殿に至る。

朝課罷わつて西の禅堂での坐禅は天童寺での坐禅という思い入れもあつて、忘れ難い思い出となる。
寄調憶江南 天童清曉 (詞)
調べを憶江南に寄す、天童清曉

天童寺 太白法源郷
寶刹無塵松籟靜
鐘聲初徹遠僧堂
開曙上禅牀

其二
結跏坐 曉色映簾櫳
赴感春禽窗下轉
隨緣花影古今同
方是忘機中

天童寺、太白は法源の郷。宝刹塵なく松籟靜かに、鐘聲初めて徹りて僧堂を遶る。曙を開いて、禅牀に上る。

その二
結跏に坐せば、曉色簾櫳に映ず。感に赴いて春禽窓下に轉ずり、縁に隨う花影は古今に同じ。方にこれ忘機の中。

(簾櫳—カーテンと窓)
拙律、拙詞をもつて、天童報恩
拝登の感銘を述べる次第。

永平高祖、また「諸法実相卷」に曰く、
「春は花に入り、人は春にあふ、月は月をてらし、人はおのれにあふ」と。

天童の春月、しばし眼底に浮ぶこの秋である。

注 『日本曆日総覽』中世前期三によると寶慶二年(一二二六年)は日本嘉祿二年、三月の望は太陽曆の四月一三日に當る。微月は三日月に相当し、「安居」が近いということから四月下旬二五・六日頃と思われる。この安居は四月一六日より始まる夏安居を指すものであり当時は無論陰曆である。又同年の立夏は陰曆四月四日、太陽曆では五月一日、江南の地にあつては杜鵑が鳴く時節なのであろう。



美しい西湖

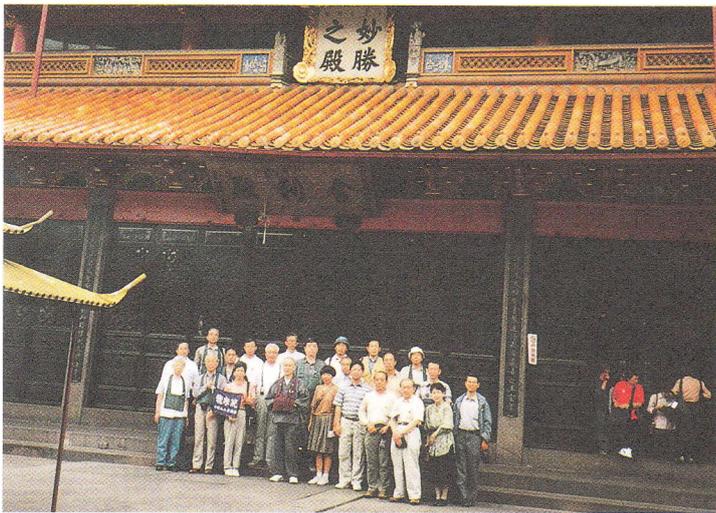
禅門五山巡礼の旅



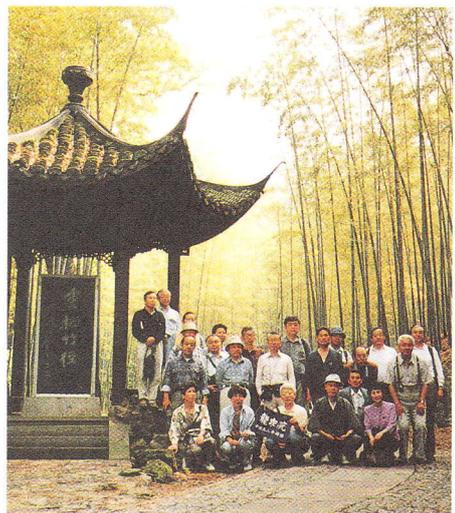
新緑の虎丘(4/28)



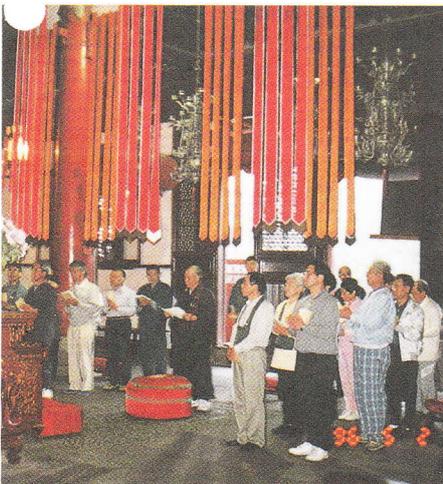
五山②靈隠寺(4/29)



五山④阿育王寺(5/1)



竹林が美しい雲栖竹径(4/30)



天童寺での朝課(5/2)



道元禅師上陸の地寧波港(5/3)

写真で見る「中国」



五山①浄慈寺(4/29)



成田空港での結団式(4/27)



如浄禅師墓塔参拝(4/29)



五山③万寿寺(4/29)



五山⑤天童寺(5/1~5/2)



神宮寺さんに記念品贈呈(5/4)

古天童での想い

柏市 高野千代子

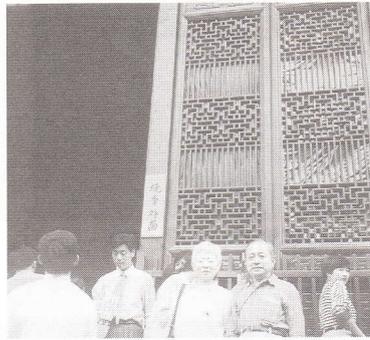
毎月の参禅会で、椎名老師よりいただく、正法眼蔵のご提唱は、ますます格調高く、その余韻にうたれ道元禪師の足跡を尋ねて中国に行けたらと願っておりました。はからずも、今回中国五山を巡る旅にご縁をいただき、皆様と共に同行させていただけましたこと、心より感謝いたしております。

思えば今から七〇〇余年前の鎌倉時代に入宋した道元禪師の旅は、今を生きる私には、とても推察することすら出来ないことがらです。求道のためには不惜身命の覚悟をもった旅であったことはうかがい知ることが出来ます。でも、何故どうして、そこまでしなくてはならなかったのか、凡人の私には計り知れない、深い深い仏縁によるものであると答えを出しました。

私は、とにかく道元禪師の歩かれた同じ場所に立ってみたい、そして何が見えてくるか期待しました。天童禪寺は大自然に囲まれた中に、広く大きく迷路の中に聳え立つ一大伽藍でした。然し道元禪師の修行された場所は、天童禪寺より少し離れた古天童で

寺は、その昔火事で焼失し、今は石垣のみがその跡を止めておりました。石垣の一つ一つを眺めながら、そこに建つ小さなお堂を拝観させていただきました。その堂守りの僧は、丁寧に私達を迎え入れてくれて、何回も、何回も「南無阿弥陀仏」と歌うように余韻をひびかせ、とおる声で称えて下さったのがとても印象的でした。お堂の片隅の小部屋には粗末なベツドが一つ無造作に置かれ、その質素な生活をかいま見て、時計の針が瞬間、その昔のままに止ったような錯覚がそこにありました。堂守りの僧との出会いで、私はとにかく気がずかしい気持ちにおそわれました。何か違うのです。何かが違うのです。何んだらうと自問するうちに、心の奢りを背負ってやってきた自分が見えてきました。堂守りの僧の純粹な求道の姿に、道元禪師が重なり、ただただ恥かしくて仕方がありませんでした。中国語にも方言があり、中国人のガイドさんにも判らなかつた堂守りの僧の説明でしたが、ただただ私達の為に称えてくれた南無阿弥陀仏の聲が、いつまでもいつまでも耳の底に残り、言葉にならない感動をいただきました。この古天童ではじめて、道元禪師の求道の

心が、私なりに、かすかに、本当にかすかに判らせていただいた想いでした。



仲のよい高野さん姉弟

緊張(天童寺・万寿寺)

そしてラブコール

所沢市 高野 哲男

天童寺

鍵のかかかっていない部屋のドアをドンドン、かけ足で各部屋をたたくせいか音が遠くなつて聞こえます。

モーニングコール

天童寺の朝のはじまりです。姉は坐禅姿で床の中に入っています。隣の部屋の境も板戸一枚です。話声がつつぬけ、私の雷いびきも四日目になると姉はなれるのでしょ

うか、何もいけません。隣の部屋の人は私のいびきでうるさくなくなつたらうかと気を遣います。姉は顔を洗ってお化粧、またたくまに出来上がり準備OKです。一泊坐禅会でなれているのだといえます。外に出ると真暗です。深呼吸をすると気持が良いです。中国に来てはじめてです。空気がおいしいです。本堂に近づくにつれて力強いお経の音が聞こえて来ます。二列に並んで朝課の仲間入りです。特別にかん高い人のお経が耳につきます。

他の人には負けていられない、熱気をおびたお経です。失礼ながら、どんなお坊さんかと思いたい思いますが、キョロキョロする訳にはいきません。

修行も未熟と心得る若いお坊さんだらうと勝手に解釈して聞きました。夜明けがはじまりました。日本ではとても経験できない思っています。

私は手を合わせて一生懸命に南無阿弥陀仏を唱えていました。終わってご老師のすきとおったごあいさつも耳に残りました。

そして坐禅堂に移動です。坐禅堂に新米である私は一番最後に入室しました。隣りにご老師が坐つ

て坐禅をはじめたではありませんか。

入室順序を間違えたかと緊張の度合いが高まるばかりでした。

道元禪師の修行したお寺で七〇人のお坊さんと朝課に出席出来、私なりのお経を上げられ、坐禅を組めたことは緊張の中に生涯の思い出となって残ることでしょう。右肩に石をのせたような体調でしたが寺田さんのぬり薬、姉の肩たたきの効果もありましたが、自然と消える不思議さに感謝の念で一杯でありました。

万寿寺

標高八六〇mの山道を登りつめたお寺、万寿寺。

ご朱印帳には佛と書いてもらいました。良い記念になります。

途中の山道はけわしいものがあり身をまかせた心地良い緊張です。基礎の出来ていない路肩に石を積み砂利をまいて道路を作ります。車のすれ違うときは路肩すれすれに車が走り、くずれたら車はひとたまりもなく谷底に転落です。ダンプで運んだ砂利を車がおろすことがわかっていても置いていきません。車がおれないから平にするまで待つしかありません。作業を早くしてもらうためにたばこ、おせんべいの差入れ、お布施です。

私はこの道路工事をみて山梨の遠い青春時代を思い出しました。古閑村から本栖湖に抜ける道です。山道を造成した道で転落事故を起こしては新聞を賑わしました。もう今ではすっかり造成され車がすいすい走っています。

万寿寺も造成中でした。この道路も数年で立派になることでしょう。たくましく、エネルギー豊富な中国の大勢の人たち、技術革新で目を見張るものがあります。無事に往復できたことは運転手さんの慎重かつ安全運転のお陰です。緊張の中に感謝の念で一杯です。

ラブコール

私は天童寺の夜以外、妻に毎晩電話、その日の出来事の報告です。五十嵐さんが点滴を受けたものの大事に至らなかったこと、作務衣が似合う安本さんにお茶の作法でござりになったこと。杉浦さんに気功をならったこと。若者の結婚式二次会の披露の様子をみたこと。グリーン車にのり上海でスイッチバック杭州に居ること。KDDを利用、遠い異国の地から話ができただけのこと。上もなく幸せを感じることもできました。姉のさそいで参加出来、妻の心良い承諾を得られましたこの旅行。広い中国の大地に足をふみ入れ、

五山の旅全員が事故もなく帰れたことに心から感謝申し上げます。帰り成田から新宿までバスで隣り合わせになった時田君、川崎在住で四〇才、独身でお金がたまる中国に行くそうで、「地球のあるき方」中国の本は赤ペンで真赤でした。中国はすばらしい所ですと訴える彼の目は輝いて見えました。私は最後に「老師をはじめ団員のみなさんにラブコールを送ります。電話は致しませんが……。もう一度中国に行きませんか。もう一度足手まといになるでしょうが連れて行って下さいませんか。

径山と天童山

千葉市 寺田 哲朗

「奥さんも一緒にどうぞ」と椎名老師と五十嵐さんに勧められました。先ずはこの事に兩人共々お礼申し上げます。

椎名老師には既に一〇年以上前から往時の禅の隆盛の地、中国を何回も訪問され、その感動体験の一部を「明珠」の「從容録に学ぶ」に現況写真を以て示されていたのでした。私等ははこの表紙ページの古風な挿絵と次ページの現況写真とがどうもうまく結びつかずに

たのですが、今度の旅で壊れた寺と建設中の寺の現物を見てからは、「昔と今はつながっているんだ」と、各則に現地現物を同時に示された「從容録に学ぶ」の構成意図によりやく気付きました。

と同時に、「この体験を参禅会々員には是非味わって貰いたい」という椎名老師の思いが実現したんだ、お蔭様で私等は何の苦勞もせず、無駄のない快適なツアーが出来たんだと分かりました。

径山万寿寺。幹事様の手作りなる案内書には「寺跡」とありましたが、破壊の後の復旧は急ピッチで進んでいました。工場生産で造ったという一〇米位の彩色の像が組立中なのと同じ境内で、宋時代の作という焼け残った等身大の佛像、割れた釣鐘、何々大和尚と彫った墓碑の一部が一緒に小屋に入られていました。

赤土に砂利を敷いた工事中の山道をバスで登ったのでした。「雨が降らない内に下山せねば」と添乗員神宮寺さんはバスの前タイヤは溝の見えない位になっていたのをお気付きだったのでしようか。結果は無事。とドライブに拍手が起こりました。

ここ径山は五山の筆頭だったとのこと。あと数年もすれば山道は

舗装され、前日参観した霊隠寺のように参拝者が絶えない風景が見られるでしょう。霊隠寺もかつては、ことごと荒れ寺だった時があつた筈と思うと、バスがタイムマシンのように思えるのであります。

天童山天童寺。道元禪師が心身脱落を体得されたゆかりの場所です。先師如浄禪師が坐禅中に居眠りしていた僧を沓で打った瞬間だったそうですが、「今朝坐禅をしたあの場所であつたんだ」と下山の日にホテルで椎名老師から聴くこのお話は昨日の出来事のような思いで拝聴しました。

所で、龍泉院のと同じ坐蒲だと思つていたら毛布を折り畳んだものや発泡ウレタン、これでは尻が落ちて腰が伸びないや、その時、「どんな場所が変わろうとも！」と椎名老師の策励の声、坐禅の間は何か短かつたように感じられました。

文革はお寺の建物だけでなく、正伝の坐禅の指導者も降ろしてしまつたのか、これでは建物が復旧しても礼拝や看經の仏教になつてしまふのでは？と思ひました。一方、私等の宿泊施設は僧の居室からすれば正に「迎賓館」でありました。そして丹精の精進料理、

バスの到着が遅くなつても待つて出迎えて頂いた僧の方々に只「謝々」。他に沢山の訪問先で物売りや労働者の生活力に触れ、誠に貴重な体験をさせて頂きました。重ねて有り難うございました。

車窓に見た

もう一つの風景

千葉市 寺田 廣葉

皆様ありがとうございます。心満たされた素晴らしい旅でした。人間はほんの少し困りに気を配りほんの少し自分より人様の気持を先に考えるだけでこんなに平和で心豊かになれる。それがつくづくわかつた素晴らしい旅でした。

私は五〇年前、銃声を背にあげながら夢中で三八度線を越えた経験があります。植民地下の朝鮮暮らしの中で（父は在シンガポール）日本人は豊かに鷹揚に親切な主人面をしてこの世の春を謳歌してました。

それが一転敗戦、天地がひっくり返る程の大騒ぎの中、幼いながらもいろんな風評に怯え、そして兄と妹を亡くした後は「この次は自分だ」という妙な覚悟をした六



仲睦まじい今泉・寺田ご夫婦

才の日の事をはっきり覚えています。

でも本当の地獄を感じたのはあこがれの日本に帰つてからでした。戦争で父を失ひ片親であるというだけの理由で進学や就職で差別を受ける沢山の友達、見て見ぬふりをする大人達、何も出来ない自分、幼い頃、徹底的にたたきこまれた民族の誇りはいったい何処へいったのか、何かを求めて私はよく鎌倉を歩きました。青い空、緑の木々に薨が映えて、そこにはまだ静寂がありました。何気なく目にした荒寺で埃をかぶつた仏像に出会つたのはミンミン蟬のなく暑い日の午後でした。

遠くを見ている澄んだ目に心が吸い込まれるような安らぎを覚え

て、仏の事、その教えを命がけて伝えた僧達の事に思いを馳せました。

私達は何故生まれ、何の為に生きるのか、そして私は何処にいくのか……。目を閉じれば幼い日を過ぎた懐かしい朝鮮の山波、南北を分つ元凶とも知らずサラサラと流れていた美しい小川、そして見た事もない筈なのに私の胸に大きく膨らんでしまつた中国の広い大地が浮かびます。恋しい恋しい故郷だけど、私の国はそして私はその地に大きな迷惑をかけ、沢山の人を苦しめてしまつたらしい……。

彼の地の人の痛みが倍になつて返つてくるような罪の意識とたとえようもない無力感の中で風に吹かれておりました。

キリストに惹かれた時期もありました。善良で謙虚な大勢の先輩が真面目に暮らしていました。

でも盲（めしい）の目があき、蹇（あしなえ）が歩く程の奇蹟を目にしながささいな事でイエスの石打つ人間の業の深さ、その後宗教戦争、植民地政策の先兵の役割りを果してしまつた事等、不勉強の為消化出来ず、原罪意識のみ心に残したまま年を重ねておりました。

今回の旅行の計画、二つ返事で

大喜びする私を想像していた夫は、理由にならない理由で参加を渋る私にもすごい戸惑いを感じたようでした。曰く「トイレが心配」も少し環境が整ってから」でも本当は私は恐かったのです。かつて栄華を誇りながらもまだまだ立ち上がりが遅れている中国、そんな所に物見遊山等に出かけたら今度こそ罰があたるにちがいない。

でも毎日少しずつ話し合う内、ロマンチックだけど生まれながらの技術屋、人間の心は私の方が少しかかるかも知れない、こんな私の思い上りは木端微塵に打ち砕かれました。強くつよく見えたけれど夫にも苦しい日があったのだと気づきました。はじめて夫の学んだ禅に興味がありました。ウワー私の知らない事ばかり：人はみんな迷い苦しみながら何百年もかか

ってきちんと答を出していたのだ。「来る者は拒まず、去る者は追わず」等と厳しい事はいわず、まずこういう考えのある事をはっきり教えてもらいたいと思いました。心の持ち方ひとつで、いじめも、争いも、強欲もない天国が現世にあらわれるのですから…。

車窓から見た中国は戦後の日本そのもの、皆何かを求め目をギラつかせて一直線に走っているよう

に思いました。でも、これ以上貧富の差が出来た時、敵に破壊され夢中で復興した日本と比べて、自分達で打ち壊し、力で奪い取った中国は、また力による争いがあるのではないか、国の中に又、万里の長城を築かなければならない日があるのではないかととても心配になりました。

御老師さまはじめ同行させて下さった先輩方、どうぞ御自分達の心や知識を照れないで職場で地域で御家庭で教えて下さい。私達を若者を育てて下さい。導いて下さい、心からお願ひ致します。

この素晴らしい旅を御計画、実行して下さいました御老師さまはじめゆかりの皆様方、本当にありがとうございます。いくつになっても新しい事を学ぶ事は本当に嬉しい事、只、知識がなくて心の中の感動の入れ物がとても小さかった事が残念でなりません。

今は一月の「禅を聞く会」の講演を楽しみにいたしております。本当にありがとうございます。



祈る中嶋さん

「中国五山の旅」と

もう一つの訪中の目的

流山市 中嶋 宏誠

今回の旅行の目的は「五山を巡る旅」と「北京で亡くなった弟の供養」のためであった。

私は南洋群島ヤルト島（ミクロネシア）で生まれ、生後三ヶ月から終戦後の昭和二年五月まで北京で過ごした。兄妹は男五人女二人の九人家族で、中国では男五人（ウーナーン）、女二人（アールニューイー）の子もちは幸福な家庭になると喜ばれた。私は昭和二〇

年四月到北京日本国民学校に入学した。当時北京の家並みは紹興の「魯迅記念館」周辺にあった黒瓦で白壁の建屋が多かった。私の家は「天一閣」を小さくしたような屋敷で中央部に庭があり四方に建物があり高い塀に四方が囲われていた。天一閣を見ながら、あのよう

な高い塀があったために、終戦直後混乱していた時でも民衆や八露軍（パロー）兵士に襲われずにすんだのだなと再認識しながら拝見した。平常時の北京で目に入った中国人（支那人）は人力車引き、馬車使い、天秤棒の両側に籠を吊り下げ「マイピンズマイ・

パオズマイ」と大声で、空き瓶・古新聞を買いにきた廃品商人、それに道路工夫であった。道路工夫は径山万寿寺に行く途中出会った人たちのようであった（当時は支那服を着ていたが）。また、蘇州から杭州の列車の中ではブランドーを飲みながら、当時両親と乗った流線型の特急アジア号を思い出した。その父は最後の召集で満州の陸軍に入隊したがまもなく敗戦した。敗戦時ソ連の捕虜になる寸前脱走し、米軍MPに保護され米軍の病院船で帰国したが、帰国直後過労で亡くなった。

敗戦後の日本も貧しく、田畑の耕作は牛が引く鋤で、輸送は荷車や牛車で行っていた。履き物は藁草履で、自動車は殆どなく、木炭バスと木炭炊きハイヤーが僅かに走っていた程度で貧しかった。

五〇年ぶりに見た中国は至るところで活気を感じた。データント後の開放政策によつて、今までの遅れを取り戻すかのようでもあった。これからは統制管理経済社会に戻らないであろう。更に自由経済社会を指向するような気がした。一〇年もしないうちに中国の総生産高は米国、日本に肩を並べ驚異な存在になるであろう。その時の日本は世界のどういう位置づけにい

るのであろうか。

『もう一つの訪中の目的』

昭和二〇年八月二一日、終戦の翌日に北京で亡くなった。弟隆生（昭和一八年生）の供養であった。敗戦が近くたって治安が悪くなり日本人は殆ど外出をしなかった。弟の遺体を火葬場にもって行くのに身内が行けず、わが家にいた中国人の通訳「巽」さんとメイドの「李」さん（リーマー）が付き添った。遺体が多く待っていてもお骨を戴くことが出来ず、後日お骨をもらった。この様な状況にあつたので、弟のお骨が本人のものかわからない。もし幸い本人であっても亡骸の灰は中国の土になっていきます。

今回道元禪師が修行した五山と寧波港を巡り、修行の熱意、深さをあらためて認識させて戴き、この参拝によって弟の供養が出来たものと感謝しております。

最後に、この様な素晴らしい旅を立案・実行して下さった椎名老師。バックアップされた五十嵐さん、小畑さん。有意義な旅をさせて戴いた一行の方々、そして素晴らしい旅を「演出」して下さった神宮寺さんに、あらためてお礼申し上げます。「今回の旅の私への土産は寧波港で椎名老師と二人で撮

影した写真である」。合掌

仏教伝来を辿る

沼南町 松井 隆

思いがけず、中国五山の旅に誘われ参加できた。その写真を眺めつつ、大変嬉しかったと、喜んでるところです。もう少し出発前に諸々の知識など身につけて行けばもっと良かった。もっと嬉しかったと思っても、後悔先に立たずと良くいわれたもので、しからば、次の中国の旅、あるいは、その次も中国に備え、そして「仏教伝来を辿る」とした大それたロマンを持つて、少しの修行、あるいは勉学にいっくらかでも励むことが可となれば、これ以上の喜びは、他にあらうはずがない。会社人間との狭間にあって、いっくらかでも心の世界に入門し、少しの書を読み、野山を歩き、畑を耕し、また少し忙しいスケジュールへの挑戦となる。残りの人生の方が短くなって、今まだ夢の実現とは、まだ人生修行が甘いと、思ったりもするが。志と反し身が動かず、根を挙げているようでは、何も前へは進まない。少し朝早く起き、坐ることも含め、続かなければ再度の中国探

訪も、無味なものとなり、般若湯の酔いに負かされ、また流され「仏教伝来を辿る」なんてどこ吹く風となりかねない。

勝手な能書きはこのくらいにして、この旅の感ずるところを記してみます。

『お寺の伽藍や建物の特徴』

大阪勤めの時、西国巡礼を含めお寺を見て歩く機会に恵まれた。宇治の黄檗山満福寺を訪れた時、これが中国の寺院の伽藍かと印象を強く持った。建物についても、蓮の花を特徴づけた窓を多く配し、濃い黄土色の壁の色合い、屋根の鬼瓦部分の跳ね揚げとその形等、何か日本のお寺にないイメージを抱き、今回の中国の旅でのお寺と全くの相似性を見い出すことができた。それに対し、質素な地味なそれ程屋根の形も大げさにせず、土や木の色を主体とした、日本なりの風情と趣を備えている。日本的でこれが私共の見なれているお寺でこの方が心休まる思いがする。が中国の人達は派手好みなのかなと思ったりもするが、町の中の様子特に家の形や壁の色は地味なので、一概に断言できない。

『都市のこと』

旅に出て初めての土地に赴くと少しでもその土地のことを知りた

い願望にとりこまれる。今回も同室の遠藤さんには何かと迷惑をおかけしたのですが、早朝一時間程ホテルの周辺を歩き回り、観光ではない、その土地の生の姿を見るような心がけたのです。今回見て回った都市は主に、蘇州・杭州・紹興・寧波であり、これらの町の規模は、日本での県庁都市程度とされます。各都市とも中心地における街路の整備は整い、街路樹は大きく茂り、河川運河を配し、また大きな公園を備えているところはやはり地理的・歴史的背景や条件による都市の発展形成をなし、相当な風格を備えた都市と感した。そして各都市ともに近年高層建築建設の波が激しく、都市の再開発が著しく進められ、さらに、日本と同じように都市の輪がスプロールしているように見えたのは私だけではないでしょう。経済の成長と住民の豊かさ、さらには都市の発展形成がバランスよく成長していくことが望ましいのですが、住宅の整備や下水道の整備など比較的日本では整備が遅れた部分を進め、質的に素晴らしい都市の発展形成を一介の建設技術者として望むところです。

『朝の体操と仕事熱心さ』

今回のどの都市でも公園や広場

では、朝早くから若者も混ざっていましたが主に中年クラス以上の人々が集まり、太極拳・剣舞・社交ダンスなどが盛んに行われていました。昭和五〇年にインドネシアに向いたとき、都市には人が溢れ、彼らは何もせず浮浪しているようにしか見えなかった。随分と異なるものだ。中国での宗教心はこのところ薄らいでいるように聞いていましたが、中国元来の宗教である道教では、死についての考えが不老長寿のようであり、いつまでも長らえるための太極拳や社交ダンスなのでしょう。漢方薬などの技術の進歩も合わせてみるにつけ、健康・延命に大きく寄与していることによるものでしょうか？ 最近では政府の改革開放政策の推進で、貯蓄が認められるようになったようで、より健康を維持し、より懸命に働くことの現れなのか、朝の通勤時の自転車ラッシュ状況などからも伺える。

たが、この度ご一緒いただいた皆様方にはいろいろお世話になりました。厚くお礼申し上げますとともに、今後益々のご健康ご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。



遠藤・添田・唐・松井さん

「中国五山の旅」を

終えて

柏市 宮本 茂

思いおこせば、五年前の「龍泉院参禅会」二〇周年に講師の一人として出席を賜った鎌田茂雄先生の講話に刺激を受け、著書「正法眼蔵随聞記講話」(講談社学術文庫)を読んで、機会があれば道元禅師が修業された寺々を自分の目と足で確かめてみたいと思ってい

たところ、今回の「中国五山を巡る旅」という機会にめぐまれてました。

さて、今回の「中国五山の旅」八日間は私にとっては最初の中国への旅でもあり、本当に一生に残る思い出の旅となりました。

今振り返ってみますとこの八日間は長いような又アツと過ぎてしまった八日間でもありました。

ここに八日間の思い出、感じたことなどを書いてみたいと思いません。

まず初めに中国という国の広いということでした。バスに乗った距離だけでも東京から岡山近くの距離だとききましたが、それにしても本当に「広い」ということを実感致しました。そしてこの広大な国で道元禅師様は自らの足で弁道のため命をかけて修行に努められたという求道の精神のすごさに頭が下がる思いが致しました。その修行された天童寺での宿泊・朝課・坐禅の体験は本当に一生忘れられない思い出となりました。あの天童寺の静寂な且つ神秘的ともいえる山々の連なり、又心からの我々への歓迎のもてなし、本当に有り難いことです。

この天童寺で師如浄禅師と道元禅師様との師弟関係が短い期間で

あったにもかかわらず、そのきづなが強く結びついたのかと思うと本当に夢心地のような気持ちになりました。

又、阿育王山に於いて道元禅師様が六〇才を越えた老典座との会話から弁道修行とはいかなるものかを悟られたという、ゆかりの阿育王山に本当に自分がここにきているのだと思つたらつくづく生きていることは有り難いと思えました。

これ以外にも西湖の美しさ、蘇州の水路、寒山寺の楓橋夜泊の漢詩、虎丘及び右に傾く雲巖寺塔、西泠印社、靈隱寺、紹興での蘭亭、魯迅記念館、寧波での保国寺等思い出は書きつくすことは出来ませんが、この五山の旅を機に再度弁道への気持を決意致しました。最後になりましたが、今回の企画をしていただいた椎名老師、五十嵐さん、旅行会社神宮寺さんに感謝申し上げます。

径山万寿寺

墨田区 室橋 旭

杭州市内より一・五時間程経つた辺りから山の入口になり、そこから道路工事が盛んに行われてい

る。径山万寿寺に行く山道の舗装であるか、道筋の山々は竹林で、竹の多いところと気が付く。

径山は七〇〇mぐらいの高さであるうか、その山道に対向車があると非常に神経を使わされる道路である。車のない徒歩の時代が今に忍ばれるところ、大岩盤の中腹に「佛」と大きく刻され、赤色で塗られた壁面を見ると、やっと万寿寺の近かさを感じる。

伽藍は、かつて清末の大平天国の乱で大破し、右手に鐘楼一棟だけであったという。そして鐘楼も六年前の一九九〇年に火災で失つて、それと共に全山の修復が六〇%という現状を当山の定康法師が、お話しになり、更に私共への歓迎のご挨拶をいただいた。椎名老師から丁寧な返礼のご挨拶があつて、それから定康法師より全山のご案内をいただき感激を新たにす。

まず新伽藍の新仏殿を拝見、そして仏具一つとっても新調せねばならないこと、改めて大火の恐怖を感じる。仏殿の真向かいの堂、天王殿であるうか、入口の両側面に「風調雨順民安楽」の文字がくつきりと彫られているのが印象に残った。

次に案内された新鐘楼で、椎名老師・小畑氏と新梵鐘を打たれた

ことは、真、心に残る一齣であつた。

春の日も傾いて、夕陽の光の中楼内には永樂元年一四〇三年のうす茶色に焼きただれた大鐘、鉄仏そして至正一〇年一三五〇年立石の歴代住持碑などが現存、また境内中央には万暦年間の大香炉が厳として往事を忍ばず風情であり、南宋には「径山興聖万寿禅寺」の勅額を受け、五山第一位となった寺の数少ない遺品であつた。

歴住の中で曹洞宗では真歇禪師が紹興一五年一一四五年から五年間住し、僧千名を擁して大雄宝殿を再建したことであり、また道元禪師をはじめ日本からの入宋僧の大半はこの径山を訪れたという。感慨深く境内を歩む。

椎名老師、定康法師と全員が新山門前で記念撮影、老杉の中に黄色の山門が映える。

終わって、先程の山道を帰途につき、日の暮れる前にと早めに山を降りる。

途中バスの中では思いの思いの感想を全員が語り合う時

間も楽しく杭州大学前もいつの間にか通り過ぎ早やホテルに着く。

天童山の静けさ

柏市 安本小太郎

楽しみにしていた、中国禪宗五山を廻る旅も終わって、数ヶ月が過ぎた。蘇州でみた大運河、西湖、蘭亭、蘇州、杭州間の汽車の旅での車窓に広がる雄大な農村風景等次々と思ひ出される。

当地では、蘇州、杭州(二泊)、紹興、天童寺、寧波、上海と七泊した。天童寺以外は市中のホテルであつた。

五山については、浄慈寺の如浄禪師墓前で大悲心陀羅尼を誦したこと、文化大革命の被害を、まぬがれた霊隠寺、山深い復興途上の万寿寺、仏舍利を拝見した阿育王寺、一泊した天童寺と、それぞれ



笑顔の中の安本さん

れ印象深い。

特に天童寺の静けさは心に残っている。他の宿泊地がホテルで中国の経済発展を象徴する市中にあつたせいか、早朝四時頃でも、自動車を始めとして常に何かの物音がしていた。

その点、天童寺は別世界であつた。バスは阿育王寺を出発して、山裾を迂回し、五仏塔を右にみて峠を越え、海岸の村落に出て、左に曲がって天童山へと登って行く、第一山門で下車して、小さく組まれた巾二米ばかりの石畳の道を小一時間登る。両側はあまり高くない松並木で、左は山、右は遠く谷で、その間に田畑がある。道元禪師も七〇〇年前ここを歩かれたかと思うと急に身近な存在となつた。

第二山門をすぎ、広大な天童寺に午後五時近くに入る。観光客、売店も多くまだ賑わっている。池の左側を通り正門に近づくと、上下黄褐色の中国服にキャハンをつけ沓ばきの僧七、八人が、崖に石段に腰かけ或は立って出迎えて頂いた。精進料理の夕食、楽しい談笑、明日の朝課に於ける献茶の打合せ等があつて、就寝は一時を過ぎていた。

翌朝二時半位に目覚めたので、そのまま起出して、洗面し、ベッ



一泊参禅会円成す

ドの上に掛布団を畳んで坐蒲として、坐禅にかかった。同室の杉浦さんのいびきも今日は無い、鳥の聲もまだ無い、自動車の音、エアコン、冷蔵庫等の声もしない、廊下の裸電球の光が、たれ下がったカーテンから、スリガラスの窓を通して、少し明る目にさし込むだけである。有るのは自分の耳鳴りの音だけだ。これも禅定の深まりと共にだんだんと気にならなくなっていく。睡眠時間の短い割には寝気も出ず、一時間位の坐禅を終わった。この様な静寂は何年ぶり

去る六月一日、恒例の一泊参禅会が、会員二四名参加のもと、多古町福泉寺にて実施されました。坐禅は全七炷。福泉寺住職の無着成恭老師より「宗教教育はどこまで可能か」とについての法話。また椎名老師からは「典座教訓」二九〇三五段までのご提唱を賜りました。

であろうか、中国に来てからも、日本でも、人工の音のしない所は皆無といつてよい。その後、竹林の径を行くこと二〇分位で古天童に至った。ここは又、山の傾面に段々畑と建物が一戸あるだけで、文明の音は更に無かった。山津波により堂宇が破壊され、現在の所に天童寺は移ったそうである。この古天童で道元禅師

は身心脱落され、以降七〇〇有余年、その恩恵に預かっている好運を思った。
今の古天童は小柄な念仏僧が一

人、小さな堂を守っているだけである。その僧の日本とは違った念仏の声は今でも耳に残っている。
合掌

参禅会発足二十五周年記念行事(その二)

〈龍泉院参禅会〉主催

「禅を聞く会」開催

十一月四日 於/柏市長全寺飛雲閣

(講演1)

「肚の文化」

大乗寺専門僧堂堂長・師家
板橋興宗老師

(講演2)

「私って何でしよう」

駒澤大学学長・文学博士
奈良康明先生

龍泉院参禅会発足二五周年記念行事の一環として、会員各位の総意にて、春の「中国禅門五山巡礼の旅」に続き今秋大講演会を開催いたすことになりました。
講師は、仏教界を代表する碩学名徳のお二方。
このような重鎮お二方による

講演会は、二度と叶わないことでありましょう。
また二大講演の他、椅子坐禅を柏市花野井の大洞院住職木村老師ご指導のもとに行われます。
会場主の長全寺の武田老師も全面的ご協力を約束してくださり、まさに百人力です。また、小畑さんのお働きで、仏教専門月刊誌「大法輪」に講演会の案内記事が掲載され広く知られることになりました。
当日はかなり多くの方のご来場が予想されますが、それらの方々にすばらしい禅の風光に触れていただくために、精一杯に誠の働きをさせていただきます。ただこうではありませんか。

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
- 一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
経行鐘 二声 経行
放禅鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く
講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師
平成八年度四月より「谿声山色」の巻を提唱
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅
月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月八日）
釈尊成道を讀え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雜記

参禅会記録（ ）中は座談の司会者

- 四月二五日 二五名
（徳山 浩氏）
筍掘り／坐禅・禅講後実施
- 四月二七日から五月四日
「中国五山禅門巡礼の旅」二二名
- 五月二六日 二九名
（窪田 光雄氏）
- 六月一日～二日
一泊参禅会 二四名
於 福泉寺／千葉県多古町
幹事 澤村 国勝氏
小沼 亮氏
- 六月二三日 三〇名
（高野千代子氏）
- 七月二八日 二六名
（美川 武弘氏）
- 八月一六日 一名
「龍泉院施食会」作務奉仕
法話 木村誠治老師
- 八月二五日 二八名
（中寫 宏誠氏）
- 九月二二日 二七名
（宮内 守氏）

- ▼ 門の旅が実現した。
中国の優秀な若いガイドさん達に、明日の中国を見た。明日の希望を自ら切り開く気概一杯。
中国仏跡の多くが、文革で破壊されたのを見、大いに胸が痛んだが、一面復興の息吹きも随所で見、眞理は不滅を実感する。
- ▼ 日本の仏教の幸いを思う。多数の寺院や仏像・書画等が温存され、人々もそれを疎外はしない。しかし仏法に目覚めた人は、そう多くはない現実を残念に思う。
- ▼ 「禅を聞く会」には、幸いにも碩学名徳の奈良康明先生、板橋興宗老師の来柏が実現となる。多くの方々に仏法の風光に触れていただけてこそ「中国五山巡礼の旅」も甲斐ありというもの。
- ▼ 参禅会二五周年は、椎名老師が、淡々と変わらぬ誠のご指導を積み重ねてこられた歴史。
- ▼ 参禅会代表の高徳な高間利介様が、六月他界された。会をこよなく愛され、会員にもきめ細かなご配慮をくださった。まさに参禅会のもう一つの顔であった。
- ▼ 有り難きかな、参禅会には、仏法の眞実が脈々と息づいている。
- ▼ 椎名老師のご指導を体現し、高間さんの遺徳を継いでこそ、記念の年となるのでは。（杉風記）

● 発行／天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉81 0471(91)1609
● 印刷／岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45 0471(43)3131